

中国で最初に牛痘種痘をおこなった Alexander Pearson のこと

八耳俊文

19世紀に西洋人が著した中国書で、中国でも日本でも読まれた書物の最初をあげるなら、『嘆咭喇国新出種痘奇書』（1805年、巻頭題は「新訂種痘奇法詳悉」）となろう。イギリス東インド会社広東商館医師ピアソン（Alexander Pearson）が著し、同貿易監督官ストーントン（George Thomas Stauton）が翻訳した、牛痘種痘法の解説書である。同書については田崎哲郎氏が英国図書館蔵本を『論集日本の洋学Ⅱ』（1994年）に影印で紹介されており、具体的に知ることができる。

ピアソンは同書を著しただけでなく、広州やマカオで実際に中国人に種痘をおこない、中国における種痘史に大きな足跡を残した。チャイニーズ・リポジトリに、1832年12月26日付けで自らの中国における牛痘種痘の体験を寄稿しており、初期の頃の苦労話を直接、読むことができる（Vol.2, pp.35-41）。いまこの記事を中心に、①王吉民と伍連徳の *History of Chinese Medicine* (1932) と、②ギュリック（Edward V. Gulick）のパーカーの伝記 *Peter Parker and the Opening of China* (1973)、③田崎氏が復刻にあたり付せられた解説を参照しつつ、ピアソンのことを簡単に紹介しておきたい。

ピアソンは中国に来る前は英船 *Arniston* 号の船医であった（1795年から1803年まで）。この間の1801年、王立外科医師会の会員（M.R.C.S.）になっている。転機となったのは、1804年5月、同医師会から広州の外科医に指名されたことで、これに応じ、1805年3月、中国に着任した。同年（1805年）には、英国セントアンドルーズ大学より医学博士（M.D.）の学位を授与されている。

ピアソンが中国に到着した時期は広州貿易のオフシーズンにあたり、着任早々はマカオで過ごすことになった。このマカオで体験したのが牛痘種痘であった。牛痘種痘法は1796年の英人ジェンナーの発見にはじまるが、まもなく世界各地に伝わり、中国周辺ではスペイン国王の命で痘苗がメキシコからフィリピンに運ばれていた。嘉慶10年4月（1805年5月）、ポルトガル人でマカオの商人であったエーウィット（M. Hewit）により、マニラからマカオへと痘苗が持ち込まれた。この痘苗を用いて、マカオでポルトガル人医師により種痘がおこな

われ、これにピアソンは立ち会い、施術に協力したのである。種痘は善感し、成功した。

貿易シーズンが到来すると、商館はマカオから広州に戻り、貿易活動は再開された。これに伴いピアソンも移り、広州でも種痘をおこなった。彼の報告によると、1805年から1806年の1年間で、マカオと広州で接種した人数は何千にも達したという。イギリス東インド会社は2年前の1803年10月にインドから広州に痘苗が持ち込んだことがあったが失敗に終わっており、かくして中国大陸での牛痘種痘法は、ピアソンにはじまることになった。

ピアソンは1832年秋に中国を離れるまで、四半世紀にわたり、リビングストーン (John Livingstone) やカレッジ (Thomas R. Colledge) を助手に、中国人にも医療をおこない、中国との交流に努めた。『澳門新聞紙』1840年7月11日号には医学のみが中国人に西洋への信頼を与えているとして、1805年のピアソンの種痘を、西洋人医師の活躍の系譜の筆頭にあげている。

彼の『暎咭喇国新出種痘奇書』は嘉慶10年6月(1805年7月)に出版された。マカオで種痘をおこなっている最中で、牛痘法の啓蒙もかね緊急に刊行されたと推測される。本書のその後のゆくえはよくわかっていないが、パーカーがモリソン号に乗り、1837年にマカオより江戸に向かったとき、持ち込んでいたことが知られている。このときは途中で寄港した琉球で関心がもたれ、現地にて写し取られている。時代は下るが『遐迹貫珍』の1855年7月号には「泰西種痘奇法」と題し、全文が再録されている。1858年には筆者は未見だが、香港から重刻版も出たようである。日本では伊藤圭介により天保12年(1841)に、広瀬元恭により嘉永2年(1849)により和刻本が作成され、牛痘種痘書の一つとして読まれた。

ピアソンの生没年については、③の田崎氏の解説であげられている東インド関係の史料によれば、ロンドンで1836年12月25日に逝去したとなっている。生年の記述はない。これに対し、①の王吉民らの著書には、1780-1874年と生没年が明記され、肖像画まで掲載されている(右図)。もし1780年生まれとすると、14、15歳で船医を務めたことになる。こうしたことが可能であったのか、筆者にはわからない。没年もいずれが正しいのか不明である。

彼が乗船していた Arniston 号であるが、イギリスの輸送船で、ピアソンが下船したのちの1815年4月、セイロンから本国に戻る途中、喜望峰近くで沈没している。この事故で乗員378人中372人が死亡、現在、難破した場所に Arniston との地名がつけられている。



ALEX PEARSON, (1780-1874)
Senior Surgeon, East India Co., Canton,
who introduced vaccination into China,
1805. See p. 142.